

---

# ひねくれ魔女の掌で踊れ

望月叢雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひねくれ魔女の掌で踊れ

### 【Nコード】

N3849G

### 【作者名】

望月叢雲

### 【あらすじ】

《紅の魔女》、《天の御使い》、大層な異名を持つ2人組に同行する元《聖騎士》。奇妙な組み合わせの彼ら3人組は、旅から旅の根なし草。彼らがゆくところには厄介ごとの影が、あったりなかったり。なかつたらなかつたで、何かを引き起こす。そんな彼らの物語。ファンタジー小説です。基本は軽く、その中にどれだけダークテイストを交えていけるか挑戦していきます。大学の文芸サークルにて連載している作品です。 - - - 重くなり過ぎないくらいに残酷な描写が入る予定です、ご注意ください。 - - -

## 〈序 章〉 少女（前書き）

誤字脱字をはじめ、文章や表現、作品に対するご意見ご感想があれば、是非ともご指南よろしくお願いします。

## 〈序章〉 少女

正方形の空間は、ただただ漂白されたように深く、白く。濃い白がすべてを淡く侵食し、飲み込んでいってしまふ。そんな圧迫感がたちこめていて、息苦しくさえある。

《少女》は一人、小さな膝を抱えていた。

年の頃は六つか七つか。白い頬はややこけ、小さな唇は渴いてひび割れ。あどけないはずの顔はひどく精彩を欠いているが能面のように端正で、能面のように何も読みとれない。

規則的な瞬きを見逃せば、硝子細工のごとく精巧な、人形を思わせるほど、作り物めいた、

無機的な印象を与える。そんな《少女》だ。白雪の肌が、床に広がった淡いプラチナプロ

ンドが、周囲の白に淡く霞む。

《少女》の澄んだ碧い双眸は、ずっと一点に固定されていた。手を伸ばしてなお届かない、

鉄格子の向こう側。四角く切り取られた碧空に、思い、馳せる。

紅に侵され、紺碧に侵され、白に侵され。それでも、碧は巡る。消えはしない。だから。

《少女》は空を見上げる。己を重ねて。

さすがに首が疲れたのか、ふいに首が傾くと、伏せがちの静かな眼差しが、白い膝の上

の白い手の甲を見下ろした。陽に焼けていない肌が、輪郭を留められず、ぼやけてゆく。

空間に溶け込んで、消えてゆく。

びくり、と身体が揺れた。

とうに背丈を越えた銀系の髪が、肩から零れて頬に張り付く。温

かな雫が頬を伝い落ち、  
手の甲で弾けた。反射的に握りしめた掌に、爪の食い込む痛みが広がる。

これは、溶けているのではない。  
これは、消えてゆくのではない。  
これは。

\* \* \*

白の世界を唐突に夜色の闇が塗りつぶす。意識は見事に霧散して、後には何も残らない。  
現実という基盤を失い、感覚が麻痺したかのような、ふわふわと奇妙な感覚だけがある。

よく、知る感覚だ。  
夢。

夢で良かった。夢なら、良かった。  
少女の矛盾した思いは、言葉にはならない。眠いのか眠くないのかはわからないけれど、  
体力回復。それが今の少女の《役目》だから。瞼を閉じたまま、ただ五感を研ぎ澄ます。

わかるのは、例えばベッドの中の温もり。  
例えば息を吸ったび肺を満たす、ひんやり乾いた空気の味、匂い。  
例えば瞼越しに見る夜色の闇。

そう、まだ夜だ。  
夜の眠りに落ちる前、瞼越しに見るいつもの光景を思い起こし、急速に意識が覚醒する。

夜の気配は寝台に潜り込んだ頃より、少し濃くなっている。夜明けよりも夜更けに近い。  
眠ってから、そう時間は経っていないらしい。

ならば、なぜ目覚めてしまったのだろうか。

私が、私でいられる時間。

何も考えず、何も感じずにいられる時間に。

聴覚に集中し、扉の向こうの様子を探る。重厚感のある扉は、ほとんどの音を通さない。

だから、なお聞こえるということは。

「……………」

瞼を開ける。カーテンの隙間から差し込む白い月明かりが、室内を青白い光で満たす。

少女は寝台から身を起こし、そして　　すぐ動きを止めた。寝

台の軋む音、寝間着の

衣擦れの音。それらに紛れて微かに何か。

開いたことのない窓の、その向こうを見透かす勢いで、少女はカーテンを凝視し続けた。

静かに、息をひそめて。

力持り。

澄んだ空色の双眸が、静かに見開いていく。

「いよっしー、やっと開いたー」

小さな声だ。息を潜めているが、よく通る。続いて、無数の影がにゅ、とカーテンとい

うスクリーンに飛び出して一つの陰に群がった。

静かなさざめきが広がるのを「しーっ」と、先の声が諫めるように少し語気を強める。

キィ。

内開きの窓が確かな意思によって、悲鳴を上げる。ゆっくりと、しかし確実に開かれた

窓からは、肌を刺すような冷気が、夜風によって室内に運ばれてくる。微かに上気した頬

には、それが心地よい。

「様子見てくつから逃走経路確保して待機な　　ったく。さん

ざ手こずらせやがって。

金持ちは絵や壺の一つや二つ、盗まれるくらいが丁度良いんだ、」  
先に仲間を諫めた口が、悪態を吐く。風に翻るカーテン越しに、  
窓枠に足をかける姿が  
見えた。よっこいしょ、と身を乗り出す。

「……………よ？」

そこで、ばっちし、少年少女は目が合った。

## 〈第一章〉 魔女の天秤

「あ、もう路銀ありませんから」

三日続いた野宿を終え、訪れた宿屋だった。歩くたび、ぎしぎしと床は軋み、いつ底が抜けてもきつと納得してしまう。代金の安さだけで選んだのだろう小さな宿だ。少女  
シザリオ「エイムズ　は、柔らかくはないが久しぶりのベッドに腰かけると、なんの悪びれもなく、そうのたまった。

\* \* \*

飯は何時から、風呂はどこで宿泊中は一切干渉しない掃除もしないから、綺麗に使え。

室内での破壊活動は弁償を請求する。

疲労困憊の旅人たちには、宿屋の主の覇気のない、しかし切実な説明を聞き終え尚且つ頭の片隅にとどめ置く、なんて芸当はできそうになく。彼ら一行にもまた、忘れさられる運命を辿りそうだった。

借りた二部屋　一人部屋と二人部屋　のうち一室、二人部屋にヒューバートはいた。

二階の端に位置する203号室。家具は壁を背に並ぶベッドが二つと、色褪せた木製テーブルに、イス。そして小さなチェストのみ。物は最低限なのに、彼を含め三人いる室内は、既に手狭に感じさせる。狭い部屋だ。入って正面に見える小さなバ



ルコニーからは宿屋の裏通り、スラム街のくすんだ街並みが見える。

何時間も背負い背負わされてきた荷物をベッドに転ませて下ろすと、ヒューはぼろきれ

だが、大事そうにくるんだ己の《命》を壁に立て掛けた。ほう、と息をついて不揃いな前髪を掻き上げる。

さて、だ。

切れ長の鳶色の瞳がじろり、と奥のベッドへと移動する。そこに寝そべる小さな少年と

その傍らに腰掛ける彼女とを見遣った。

「マルコシアス寝るな。……お前も。部屋に戻って荷くらい解いてきたらどうだ」

「えー」と少年。「ええー」と彼女。

「えー、じゃないっ片付かんだろうが！

……否、それより何より一体何が入ってるんだ、この間から尋常じゃない重さにパワー

アップしたぞ！？」

怒鳴り声の最後は悲鳴に似た叫びになった。後者の方がよほど重要だったらしい。その

気迫にくすりと彼女が微笑い、にやりと少年が嗤う。ヒューの眉が跳ね上がった。

「ヒューってばだつらしなーい、弱音え？ 腕っ節が取り柄なんだから、しっかりしてよ」

少年の碧空を思わせる碧の瞳が、活き活きと輝いている。ヒューにとっては嫌な輝きだ。

玩具を見つけた子どもの目。情け容赦ない。

「……マルコシアス」

苦虫を二、三匹ほど噛み潰したような顔。一オクターブ声を落とす、ヒューが呼ぶ。

マルコシアス。それがこのクソ生意気な、しかし天使のような美少年の名である。無論、

後者は主に外見において、の話であるが。

年の頃は十歳前後か。肩口まで伸びた淡いプラチナブロンドは、先ほどから隣の彼女が

優しく梳いてやっている。梳く、というよりよしよし、と撫でていと云った方が正しい。

マルコシアスは枕に半分押し付けた愛らしい顔を不本意そうに、しかしまんざらでも無さ

そうに、淡雪を溶かしたような白い頬をほんのり染める。大きな碧い双眸を細め、受け入

れていた。その素直さは残念なことに、この青年にはほとんど発揮されない。

「……………誰が弱音など吐いた」

「違うの?」

無論。と、憤然と頷く。

「これくらいのこと吐くか」

「そうかそうか、そうだよな。ヒューが弱音なんて吐くわけがなかったよな、ボクの取り

越し苦労だったよ」

「ここにここに」。

「……………物分かりがいいな、今日は」

「あははははははははははつ何言ってるのヒュー……………いつもでしょ、ボクほど物分かりの良い

お子さま、そうはいないよ?

そんなことより、ヒューも

大丈夫みたいだし、

今後荷物持ちお願いできるね、良かったねシィ」

「な」

「そつだシィ、後で二人で図書館行く?」

髪を撫でていた手を取ると、甘えるような声音で手の主を見上げ

る。

まずい。

と、ヒューはこれまでの経験上で悟った。「ねー」と二人して首を傾げられた日には、

それは彼らの中のルールにされてしまう。決定権は彼女にある。彼女が頷けばおしまい。

ヒューは晴れて荷物持ちとなる。

……それ事態別にヒューも構わないのだが。強制されれば反発したくなるは人の性。

そして、少し遠慮しろと思うのもまた人情。

「待て、そんなことは言っていない」

「何、ヒューは大の男にも重い荷物を女子どもに持たせようっていうの」

「……………。お前、都合の良い時だけ子ども子ども……………」

マルコシアスの額　皮製のヘアバンドで隠れた部分　とぶかぶかの服とを見遣る。

ヘアバンドはおしゃれのため、というわけではないし、服は単にだらしのなさからという

わけではない。理由はある。が、違うのだ。

いつまでたつても進まない禅問答。

慣れたつもりであっても相手の思惑に乗ってしまいそうになる。

己の忍耐力の未熟さを

思い知る。がしがし、と乱暴に頭を搔いた。

まだだ、まだ怒るまい。

「あらあら、もうお終いなんですか」

鈴を転がしたような優しい声音が、しかしその優しさとは正反対のことをのたまった。

まるで、残念とでも言いたげに。

「……………何か悪いのか」

ややうんざりヒューが応じると、につこり。涼しげな薄い黄金色

の瞳を細め、彼女こと、シザリーオは微笑った。それに合わせて暗く深いワインレッドの長い長いツインテールが、さらさらさらり、肩から背中へ零れてゆく。濃いその色は、マルコシアスほどではないにしろ、ヒューの健康的に焼けた肌よりよっぽど白い肌によく映えた。「ええええ、もちろん」

シザリーオが脚をゆったりと組みかえて、ヒューへと体を向ける。漆黒の長衣に細長い白い布を右肩から身体に巻きつけるようにした衣装は顔以外にはほとんど露出がないが、座れば別だ。長衣のスリットから白い肌がのぞく。……太腿で固定してあるベルトに鈍く光るものが多数あることは、ヒューにはそれほど問題ではない。

年頃の娘が無防備というか、なんというか。ふう、とため息にも似た吐息を漏らしつつヒューがとても不自然に目を逸らしたのを、彼女のつり目がちの大きな瞳は見逃さない。

二十半ばでは純情というか、なんというか。くつくつと、人の悪そうな笑いを漏らしながら、シザリーオは続けた。

「悪いですとも。そろそろ私も混ぜてもらおうかなー、と思っていたところだったのに。二人だけで仲良くして、私だけ仲間はずれにするなんて、ひどいです」

「「はあああつー!?」「」わざとらしい台詞に、わざとらしい仕草。普段はノってくるマルコシアスまで勢い込んで跳ね起き、ヒューはシザリーオに詰め寄る。

「どこをどう見たら仲良く見え」

「ちょ、シイ、気持ち悪いこと言わないでよ！あつ、シイが気持ち悪いわけじゃないよ？」

でも気持ち悪い。寒気……うつつん、吐き気がするよ、反吐が出そう」

……。同感だと思っ反面、

ここまで言われて黙っ

ていられるほどにこの男は、ヒューバート「ウヴァル」オーシーノは大人ではなく。

切れ長の瞳がすつつ、と細くなる。無駄な筋肉のない均整の取れた体躯には上背があり、

見下ろされるとなかなかの迫力があつた。が、マルコシアスも臆さずに、そのつぶらな瞳

からは想像できないほど冷めた微笑を向ける。

「……血反吐を吐かせてやるうか、クソガキ」

「うーわー、聞いたあシイ、児童虐待だよー」

「棒読みで言うな」

不穏な雰囲気漂わす二人を余所に「仲良きことは美しきかな、ですねえ」などと頷く。

ああ、聞こえてない聞こえてない。

ほんの一瞬鋭く視線を交叉させ、マルコはふん、と顔を背け、ヒューは目を伏せどっか

りとベッドに腰をおろした。それをくすくす、とシザーリオがおかしそうに笑い

「あ」と、不意に呟いた。叫ぶような鋭さはなかったが、不審に思いヒューが顔を上げる。

彼女の表情は、先程と変わらず穏やかだ。しかし、目を惹く何かがあつた。隣の子ども

のように特別な麗人、というわけではないが、シザーリオには雰囲気がある。良くも悪く

もよつく目立っててしまふ、不思議な雰囲気。中身を知っていて尚、目が逸らせない。

指部分の露出した黒地のグローブ。それを装着した左手・人指し指をピンと立てると、

彼女はさらりと最初の一文を言っただけだ。

「もう路銀ありませんから」

と、きつぱりと。

路銀が、尽きた。

ヒューは自分の頭でももう一度範唱し、こめかみを押さえた。怒りよりも脱力感が体を襲い、自然と項垂れる。その顔面を突如、全身全霊の力で何かが襲った。右手を風いで咄嗟に叩き落とせば、枕のなれの果てが床に転がり「ちッ」という舌打ちまで聞こえたが、ヒューはそれより、弁償代の方が気になった。

路銀とは、路用の金銭。つまり旅費や路費のことという。

それが尽きたということは宿代も払えなければ、買出しもできない。もちろん、この町

で金を稼がなければ旅も続けられないわけだ。旅人にとっては一大事のはずなのだが、彼

女に加えてマルコシアスにも、危機感の欠片もうかがえない。

「ま、仕方ないよね。無くなったものは」

むしろ驚いた様子もなく、いつものことのように彼は笑う。そう、よくあることなのだ。

「……今度はなんだ、薬草か毒薬でも仕入れたか」

腰のベルトに統一感なくぶら下がっているもの　　銀の懐中時計にサバイバルナイフと

いった実用的なものから、ブレスレットサイズの小さな小さな冠型装飾品、なんてわけの

わからないものまで様々　　のうちポーチを促すと、シザーリオは

「あー」とベッドに放

り出された荷物を見やる。その様子にヒューは合点がいった。あの凶悪な重みの犯人は。

「異界から伝わったという童話集をマルコが見つけてくれたんですよ、手始めに五冊ほど」

「掘り出し物だったでしょ、シィ」

「はいっ。マルコ、探してくれて感謝します」

「どういたしまして。シィのためなら埃まみれになることも厭わないよ、ボク」

「生活を切りつめてまで買うものか！ 書痴も大概にしるとこの間も言っただろうっ」

年の離れた姉弟の微笑ましい一幕まがいヒューが怒声とともにぶった切る。

「わ、怒った怒った」

「喜ぶな！ そしてとっとと売って来い！！ 本など荷物なだけだ。お前たちは旅をする

人間として自覚が足りん！！」

キャリア的には彼らの方があはすなのに。

彼女と少年、二人の旅にこの青年が同行し始めてもう三ヶ月近く。路銀が尽きたのは今

回が初めてではない。疲れている時に聞きたくなかった、とヒューが頭を抱える。

「えーいらぬものなんてありませんよ。それに、ご安心を。既に仕事を用意しました」

その一言におそろおそろ顔を上げた青年の、複雑そうな表情が状況を物語る。ヒューに

とってあまり芳しいとは言えない、その状況を。

「…………。根回しの良いのは結構だが…………」

言い淀む。用意されてしまったのは、ヒューにはもう選べない。ヒューの歯切れの悪さに、

血色の良い紅い唇が、弧を描いて歪む。

「貴方のご期待に沿っていると思いますよ。ま、とりあえず続きは食事をしながら、ね？」



## 《第二章》 - 1 野良猫

ニコライ<sup>ニコライ</sup>・シntaxクラーは野良猫<sup>こゝろねこ</sup>である。

正体こそ知られていないが、怪盗のように摩訶不思議な手法で人々をあつと言わせるわ

けでもない。悪をこらしめ善を救うことを建前とする義賊に同じく不正の金持ちから盗む

ことはあつても、あくまで《偶然》である。無いところからは盗らない、このなけなしの

彼ら集団の矜持<sup>プライド</sup>が、必然的に《偶然》の確率を上げているのは、まあ、確かであるけれど。

顔も名前も知らない貧乏人に分け与えてやるほどお人好しでもなければ、その余裕もない。

ただ、私利私欲のために。

盗賊と対極をゆくスマートさを持ち味に、闇夜に紛れ彼らは動く。こそこそと。

つまりは。

「んん、あああああ……」

なんとも言えない奇声。それと同時にそれまで丸くなっていた物体　ブランケットに

くるまっっている誰かさん　から四肢が顔を出すと、思いつつきり限界まで伸ばされる。

見えない背中が弓なりに反れて、背骨がこきこき、と良い音を立てた。

太陽が天頂から降りてくる、その頃になってようやく彼の住処には陽が差すようになる。

空気はまだひんやりとして冷たいが、窓辺に備え付けてある棚の上は暖かく、日向ぼっこ

には格好の場所だ。少々、硬くて狭くとも。

止まっていた息を盛大に吐き出す。太陽の匂いのする、色あせたブランケットから顔を出した少年は、眩しげに翡翠の瞳を細めた。

つまりは、ニコライⅡシンタクラスは、根っからの夜行性、なのである。

顔を照らす陽光は、柔らかい。柔らかいが、それにしたって時刻は正午だ。直射日光の攻撃は、寝起きのニコライにわずかながらダメージを与える。左手で遠くの元気な恒星を遮ると、ニコライは薄明るい天井を見上げた。朝も昼も夕方も。いつだって、この部屋に光が満ちることはない。そういう場所なのだ。

裏通り・メインストリート。表通りとは違い、店舗のない露天商や非合法的な店舗も数

多く軒を連ねるこの通りの、さらに路地を進んだ先にスラム街の住人たちの家々はある。

それはもうもう隙間なく。詰め込まれている。

日陰者の巣窟。

などと失礼なことをのたまう連中もいるが、ニコライとしては一緒くたにされるのは大変心外だった。ニコライ自身に関して否定することはしないけれども。

ふああああ。

お上品に口に手を当てることなく、豪快に大口を開け身体を起す。

「……でかいあくび」

ややかすれた低音ボイス。ついで運ばれてきた温かなにおいに、ニコライが部屋の扉へ

正確には元、扉のあつた位置である。鍵代わりだった建てつけの悪さを《破壊行為》

という、実にシンプルな方法で突破されてから、未だ修理はできていない。目をやると、

よく知る少女がそこにいた。

綺麗に束ねた黒く、濃いドレッドヘアを肩に流したほっそりとした立ち姿。つまり、

凸凹のあまりない小柄な体躯。飾り気のない黒のノースリーブ・パーカーから伸びる細い

腕にも、だぶだぶの作業ズボンにも、恐らく木炭でも使っていたのだらう黒が散っている。

動きやすさ重視のこのファッションセンスは、一見して少女、というより少年を思わせた。

年頃の乙女が無頓着過ぎやしないか、とニコライは思う。おにーちゃん哀しい、と。

部屋の真ん中を占拠する長方形のテーブルの、雑然と置かれたものものその中で。

それらを寄せて無理やり作った空間に一冊の、やや黒ずんだスケッチブックがある。少女

の格好からして今朝も描いていたのは明白だ。今の少女は異性より、絵にご執心。むしろ

恋人、という勢いかもしれない。

眠気まなこでそこまで考えて、はた、とメイジーの手に握られているものに目を止めた。

少しばかり欠けたところはあれど、それはまぎれもなく二人分のマグカップ。

「メイジー愛してるっ」

さっすが俺の妹！ つーか腹減ったーっ。

ブランケットを脱ぎ捨て飛びつかんばかりにニコライが駆け寄ると、メイジーは大きく

一步退いて 引いた足とは反対の右足を、流れるように突き出した。十代半ばにしては少し大人びた顔を少し歪めて。

「……おそよう、目は覚めた？」

「……はい」

ニコライは、《妹》の靴底を目の前にへら、と笑った。降参降参もうしません。そう顔の横に手を上げ示すと、ようやくメイジの足がゆっくり降りされる。いっしょにカップの中の液体が揺れるがこぼれるには至らない。ちなみに、まだ湯気が出ていたりするので、本当に飛びついていたら二人とも火傷の一つもしたかもしれない。だから、わかる。

《兄》の毎度のおふざけに付き合っただけでやる孝行者な《妹》は、琥珀色の瞳を伏せてため息を吐くと、カップを改めて差し出し、

「……で？」

そして、ここ一週間ずっとずっと兄に先延ばしにされ続けた話題へと移行した。

思わずわーい、とカップを受け取ってしまったニコライは、泳いでいないか心配な目を笑みで誤魔化そうとして、しかしその笑顔が引きつっていそうで心配だったので、スープに口をつけて表情を隠そうとした。が、

「あっつ」

と、焦って舌を火傷させてしまうくらいには動揺しているのがメイジーにも見てとれた。

くっ、動けなくなってしまった。

スープはタマネギやニンジンの皮なんかを利用したもので、量は物足りないが塩・胡椒

の塩梅なんかは丁度良い。いや、味のことはこの際関係ないのだが、  
ともかく温かいとい  
うよりは熱いスープ。受け取ったからには飲み終わるまで席を立つ  
ことは許されないし、  
そもそも久しぶりの《妹》の手料理、残して立ち去るなんてもった  
いない。しかししかし、  
息を吹きかけても時間のかかる代物を、既にじんじんしていたりす  
る舌で一気にあおるの  
は不可能だ。自殺行為だ。……少女の名誉のため補足すると、スー  
プは少女の嫌がらせで  
熱いわけではない。彼が極度の猫舌なだけだ。ともかく、スープを  
飲み終わるまでの時間、  
少女の熱くも冷ややかな眼差しから沈黙を守るといのは……き、  
気まずい。

今日はいやに気が利くと思ってはいたが、《兄》の性格諸々をも  
とによく考えたものだ。  
素直にニコライは感心する。頭の回転が速い。他人なら、仲間にス  
カウトしたいくらいに。

カタン。

音につられ視線を向けると、メイジーが椅子の背もたれを前にし  
て腰をおろしたところ  
だった。熱いスープ　あくまでもニコライの主観によるが　を  
口に運びながら、視線  
は彼から逸らさない。

沈黙に耐えられなくなった方が負け、そついう持久戦。軍配は、  
勿論

はああああ。

ニコライは盛大に息をつく、元いた棚に腰を下ろしカップを隣  
に置いた。

少しくらい冷めた方が丁度良い。それに、少女はそれがお望みだ。肩にかかる明るい蜂蜜色の髪をくしゃり、と掻き上げる。寝起きの髪ははね、絡まって  
ところどころひっかかる。ニコライは乱暴に手櫛で梳くと、首の後ろでひとつに結った。

迎撃態勢完了。

泳いでいたニコライの目が、今やまっすぐ己を見据えている。下手をするとメイジーより幼く見える面差しが、への字に曲がった口のせい、今は一層幼く見える。

メイジーは微かに薄い唇の端を持ち上げた。

「……………嬉しいか、メイジー。嬉しいか。なんだか今回ばかりはにーちゃんいつしよに喜んでやれないよ」

ちつと舌打ちしたい気分。

「……………別に、喜んでくれなくて良いよ」

今度は本当に舌打ちしたニコライだった。それには堪えぬ少女は、「それじゃあ、聞かせてもらおうか？」

「ここの一週間、何をこそそしているのか。」

淡々と、冷やかに。

マグカップをテーブルに戻すと、背もたれの上で指を組んだ。その上に顎を乗せ、悠然と少女も構える。

ニコライは一つ息をつくとへら、いつものように笑って、応えた。

「何何、俺の朝帰りはいつものこつたる？ 今更何に目くじら立てることがあるよ」

「……………そうだね、朝帰りは問題じゃない。わかってるでしょ」  
表情は変えずに、ニコライも思う。  
もちろん、わかっている、と。

ここはスラム街。貧民街とも言われるこの街は、治安はあまり宜しくない。表に出られないような、非合法的な職種達もよく集まる。そんな街に住む住民にとって、情報は大事な自衛手段の一つだ。

「別に今までだって、情報収集しようと思ってきたわけじゃなかった。それでも、自然と

集まるものはあって……把握してた、そのつもりでいた」

「……………」

「みんなの《仕事》について、ケチつけたりはしないけど。いざって時、口を挟むくらい  
のことはできるって安心してた」

色んな意味で。

ほんの少し含みを感じて、ニコライはへらへら、とだらしなくあ  
いまいだった笑い顔を、  
苦笑へと変える。

存外、少女は強かだ。心配と欲望の割合は、さてさていかほどく  
らいなのだろうか。

ニコライの心中を余所にメイジーは続ける。

「ただ、近頃は変だよ」

どうして、情報が降りてこない。

「……………これは、噂話だけだよ」

「隠さなくて良いよ。どうせ、ルドだろうか？ お前にわざわざ話す

おせっかいは

「……………情報もとは明かさないのでが礼儀でしょ。わかっ

ても言わないでよ」

「認めたようなもんじゃん」

ニコライたち野良猫集団ワイルドキャットの、サブリーダー。ルドルフの頭を抱える姿を思い浮かべ笑う。

後で覚えてろよー、ルド。

友人思いの友を持てたことに対する喜びか、それとも少女にあることないこと告げ口さ

れた怒りか、顔が綻んでしまふニコライだった。

「……………話の腰、折らないでくれる」

「へーいへい、進めて?」

ニコライが左手でどうぞ、と少女を促す。

何故だか徐々に機嫌がよくなってゆく《兄》と対象に、それを訝しげに見ながら《妹》

は普段は重い口を開く。

「これは噂話だけど、馬鹿な女に貢いでる、とか博打にはまった、とか」

「んなッ」

「もしもそういうことがあるのなら……………」

「ええっメイそれ信じんの!? 信用なさすぎじゃ俺! おにーちゃん泣いちゃうよッ」

「……………聞いて。とにかくもしそんなるくでもない理由ならね?」

椅子から立ち上がる。三步もない距離だ。ニコライの目の前に、少女が立ち塞がるのはすぐだった。

なんとなく、なんとなく底知れない恐怖を感じニコライは後ずさりたくなった。しかし、

すぐ後ろは窓。後退には限界がある。

ガンッ。

鋭い音を立てて身体が揺れた。けれども、ニコライ自身の身体は痛くない。

先ほど見せた見事な足さばきが、ニコライが腰かけている作業台へと炸裂したらしい。

早かった。そして重い一撃だった。

「どんな手え使っても、目を覚まさせてあげないと、と思って



妹として」

そう言つて、瞳を柔らかく細める。行動とは裏腹に、慈愛に満ちて見える少女の微笑。

しかし、ニコライは素直に喜べない。

妹。

こんなときだけ、こんなときだけそれを使うのか卑怯者！俺が言つと微妙な顔しかななくせによつ。

頭の中でぐるぐると言つてやりたい言葉が浮かんでは、それを上回る焦りに流される。

そう、彼には思い当たる節がある。彼の名誉のために補足すると、けして悪女に引つかかっているわけではないのだが。

ことは一週間前に遡る。

彼らがバジレ伯爵家・街屋敷タウンハウスでの《仕事》を決行した日。結局それは予想外の出来事が

重なり未遂に終わったわけであるが、その日。

ニコライは、一人の少女に出会った。  
とにかく、驚いた。

事前に抱き込んだ使用人の情報では、ニコライたちが侵入経路に選んだ部屋は、今は誰も使っていないという話だったのに。

そしてもう一つ。そのとき、彼のいる部屋に向かう人物がいた。さらに言えば、その接

近に気づいたのは部屋の鍵穴に鍵が差し込まれた、正にその時だ。血が下がっていく冷たいあの感覚を、ニコライは一週間経った今も、覚えている。

二時には屋敷の主一家　バジレ伯爵夫人とご息女の二人。伯爵は仕事で屋敷を空けがちだ、という話だった。他に、使用人たちも休むと聞いていたのに。

今になって考えると、かの部屋はひどく防音設備がしっかりしているのかもしれない。

その後、どれだけ騒いでもニコライが無事できていることからそう考えている。ついでに

言えば、防犯対策もそうだ。唯一つの窓には複雑な鍵に加え、魔術まで施してある嚴重ぶりだ。彼はひどく手を焼いた。

最近、彼は思う。

まるで牢獄のようなあの部屋が、おそらく屋敷の騒ぎに気付くの

を遅らせたのだ、と。

とにかく危機的な状態だった。

少女一人なら、どうにでもなった。しかし、複数となると話は変わる。幸か不幸か仲間

は逃走経路の確保に散っていた。

自分、ひとり。

即座に身を翻せば自分は助かる。けれど、何も知らず待機している仲間は、どうなるか。

ニコライはそれまで窓枠にかけていた足を部屋の中に踏み入れた。室内に身を隠したと

ころで少女が誰かに告げてしまえば終わりだ。なら、一人でも多く助かるよう自分が時間

稼ぎをする。一目を引きつける。それがベスト。

一番手っ取り早いのは、少女を人質にすることだ。……《妹》と同じ年頃の女の子相手

は、あまり気が進まなくとも。騒ぎに気づけば機転を利かせた仲間が一旦は引くはずだ。

問題は、むしろそこからだった。

仲間のためとは言え我が身が一番可愛い。それは誰にも言えることだ。ニコライもまた

そうだ。他人様のために身を投げ出し、どんなに立派だと赤の他人から褒め称えられてい

る人物がいたとしても、彼には生物としての生存本能がイカれているようにしか感じない。

ニコライはシンタクラスはけしてお人好しではない。自分が矢面に立つのなら、勝算

がなければやっていられない。ひとりで逃げ切れるのか、それを咄嗟に考えた。

時間にして、三分もない。

それでも、少女が少年の腕をとりに行くだけなら時間は充分すぎ

るほどあった。

ニコライは、最初何をされているのか全くわからなかった。少女は文字通り少女、で。

ニコライも少女の対となる、少年という名詞が当てはまるくらいの年代だ。十五、六歳の

この頃はさすがに男女の体格には差が出る。ニコライは十六にしては少し身長が低いが、

それでも体力勝負な《仕事》柄、それなりに筋力は付けている。年下だろう女の子に引つ

張られたぐらいでは態勢を崩すことはない。

否、そもそも

少女はニコライの衣服

の袖をただ掴んでいるのであって、捕まえているという力みを感じなかった。細腕の割に

握力はあるのか、ちよつとやさつとでは振り解けそうにはなかったが、まあ、それでも。

その印象は変わらなかった。

「……………」

ガチャガチャガチャ。ガチャリ。

鍵穴が回った、その音に肩が震えた。が。

ガチャガチャガチャ。

また継続して音が復活する。

扉の前にいる人物も、ニコライたちと同じように解錠に四苦八苦しているのだろうか。

内部からも簡単に入れない部屋って……構造上どっかおかしいんじゃないねえの。

内心でその幸福に感謝しながら、それでも毒づくことも忘れずにどうしても少女より

扉を確認せずにはいられなかった。

ちらり、と見る。

息を飲む。

窓の正面にある扉は、青白い月明かりに照らされ何よりもはつきりと映る。重厚感のある厚い扉。そこには取っ手が、ない。

ガチャガチャガチャ。

扉の前にいる人物は、鍵を開けようとしている。なのに、内側から鍵を開けるための装置は一つも見当たらなかった。

ニコライは少女を、そこで初めてちゃんと少女を見つめた。夜の生業だ。これでも夜目は利く方だと、彼も自負している。

ふわり、と窓から運ばれた風に遊ばれる長い長い髪は、癖のないストレート。よく手入れ

されていることは、言われなくともわかる。襟開きのゆったりしたワンピース式の寝間

着。俗にいうネグリジエは、裾に向かうにつれフリルやレースがあしらわれていたりし

て、貴族さまは夜に着るものまで随分と違うのね、というところをニコライに再確認させてくれたりもしたが、そこではなくて。

互いの視線がぶつかる。

何ものも読み取れない能面のような、美貌。ニコライにはそれを褒めそやしてやれるだけの豊かな語彙はないが、綺麗だ、と思った。思ったけれど、そこでもなくて。

静かすぎた段階で、おかしかったんだ。

今でこそできる反省だが、この時少しでも少女に気を配っていれば良かったと思う。

盗人が侵入したというのに、悲鳴ひとつ上げず、泣いたり震えたりするわけでもない。

恐怖で声が出ないのかといえば……静かに彼の姿を見つめていた様

子からは、そう想像するの難しい。だからと言って、血気盛んに彼の隙を窺い、捕まようとしていたのか、と  
いうとそれも違う。その殺気さえあれば、もっと早くにニコライも意識することができた。

まるで、そういう絵画であるかのよう。

少女は寝台に腰かけたまま動かない、そんな気が、ニコライはしていたのだ。

結果オーライだったとはいえ、意表を突かれてしまったのは確かだった。

とにかく、ニコライは少女と目が合った。少女の、焦りと不安両方の滲む瞳と。

焦燥感？ どうして。

ニコライがそう感じるよりも早く、少女が少年を引き寄せる。無論留まることもできたが、思わずニコライの足が自然と動く。

向かう先は、先ほどまで少女が腰かけていた寝台だ。意図は読める。この部屋で隠れる場所  
は寝台の下、くらいのものだ。

これもまた、通っている今だからこそ言えることだが、本当必要最低限のものしかない

部屋だ。寝台以外には木製の、装飾も美しい勉強机に、積み上げられた分厚い本の山々。

同じような本本本が、天井まであるかという本棚に並んでいるが、それだけだ。

ニコライも飾り立てろ、と言いたいわけではない。必要な物しか置かない。彼には到底  
できないけれど、それも個性のひとつとしてあることもわからないではないのだが。

なんとなく物をやりたくなるというか……ああ、これも一種貢い

でいるのかもしれない。

メイジー、大正解！

実際には本人には言えない賛辞を送った。

ともかく。

ニコライは、少女に導かれるままに寝台の前に辿りつくと、案の定、示される寝台の下、床の上。

しゃがんで、入ってたか。

少女の身分は不明だが、閉じ込められているという、ニコライの見方は正しいだろう。

使用人、には見えない。小奇麗過ぎる。

少女が伯爵家の令嬢で、ここに謹慎中とか……雰囲気的にはそちらの方が、まだ納得できるが、こんな牢獄のような部屋に娘を入れるだろうか？

気にはなったがニコライには、それを確かめている時間はなかった。

ガチャリ。

鍵穴が、回る。

外開きの扉が開いてゆく前に、ニコライは寝台の下に身体を滑り込ませる。

少女が何者かは知れないが、とにかく屋敷の者に肩入れしてやる筋合いにはなさそうだ。

少なくとも、今は。なら。

賭けてみよう。

ニコライはそういう気になった。

ニコライが寝台の下に身体を滑り込ませると、身を隠せたことによる安堵と、逃げ場のない不安とがすぐに押し寄せてきた。

どくどくどく。いつもより早い鼓動が、耳の傍で聞こえる。聴覚がうまく働かない。結構な興奮状態だ。

落ち着け、落ち着け。そう自分自身に言い聞かせるも納まらない。そんな彼が頼れたのは唯一視覚だけだった。

高さ三十センチに満たぬ狭く、低い視界。シーツにところどころ覆われたそこから見えるのは、月明かりにも白い少女の細い足と、ひんやり冷たい床に伸びる黒い影。

そして。  
ギイイイイ。

重く低い音とともに、床に扉の影が加わる。ニコライの位置からは扉の陰になつて闖入者の顔こそ見えはしないが、月明かりに青白く浮かんだドレスの裾から、女だとわかる。

女。  
まあ、深夜二時を回ったこんな夜更けだ。異性が訪ねてくる方が健全だが問題がある。

どくどくどくとつるさかった鼓動は、急に静まってはくれないが、徐々に聴覚が感覚を取り戻してゆくのがニコライにもわかった。

いやいやいや、油断するのはまだ早いぞ俺。前にも痛い目にあつたじゃないか。



風と遊ぶ、暗く深いワインレッドの、長い長いツインテールが脳裏をちらつく。本能が警告する。同じ失敗はするな、と。

ニコライは一つ息をつく、そろそろと右の袖をまくりあげた。現れた前腕には、皮製のベルトで固定してあった投擲用ナイフが2本。それを抜き取り、よく手に馴染んだ柄をしつかりと握り込む。雲行きがおかしくなれば、いつでも飛びだせるように身構えた。

問題は人数と、女が部屋を訪れた目的だ。

少しでも情報を収集しようと耳を澄ますと、鼓動が鼓膜を叩く音に混じって声が聞こえる。

真夜中ゆえ声を潜めているのか、はっきりと内容までは聞き取れない。しかし、会話でないことは、すぐにわかった。

「……………」

鋭い息遣い。激しい衣擦れの音。

その呼吸、その気配に、ざわり、と背筋に寒気が走る。己の肌が、本能的に粟立つのを

ニコライは感じた。

瞬間、高く乾いた音が響き、少女の白い足が、勢いよく傾いた。

\* \* \*

「……………おいっ」

寝台から這い出したニコライは、床に座り込んでいる少女の姿を見つけた。乱れた衣服からのぞく肌に、痛々しいあざの痕が散る。

女が立ち去る前、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も、人が人をぶつ

嫌な音が聞こえて。再三、ニコライは飛び出そうと考えた。すぐに女の口を封じれば、正しくそのままの意味で、被害もない、と。しかし、ついに寝台に床に倒れ伏した少女が、それを阻んだ。

痛みに涙を流すのではなく。

恐怖に声を上げるのではなく。

憎しみに顔を歪めるのではなく。

床に転がった少女は、寝台とシーツの隙間からニコライを静かに見つめ続ける。それは、助けを求めて懇願するようなものではなくて。むしろ、むしろ真っすぐに少女の眼差しが、ニコライには「動くな」という意思表示に思えて、動くに動くことができなかった。

言い訳か。

ただ、自分の身可愛さに、都合の良いように解釈しただけなのかもしれない。結果的に

少女のおかげでニコライは無駄なリスクを負わずに済んだのだから。

「おい……大丈夫か」

もう一度、声をかける。

女は扉を開け放したままに、出て行った。衝動的な行為でなければ、少女に「出る」といつているのか。それとも、また誰か来るということか。長居は無用なのは、確かだった。

ようやく気付いたように、ゆっくりと少女がニコライを見上げ、微かに小首を傾げる。

長い睫毛に縁取られた瞳は、磨かれた硝子玉のように無機質に、ニコライの姿をただ映す。

細い肩から零れる長く、豊かな白銀の髪。繊細な硝子細工みたいに整って、体温を感じさ

せないその顔も、華奢な腕も脚も、体軀も　彼女を成す全てが、  
一分の狂いもなく美し

く儂げに、完成されている。けれども、うすぼんやりとした感じに  
己を見上げるその仕草

は、どこか幼い、無垢な幼子のようで。

無意識に左手が、少女の頭上に伸びていた。

「！」

そうして、はた、と止まる。

年頃の女の子に、これはないよな。うん。

しかも、ナイフを指に挟んだ手だ。

「あー……腕の体操は、良い気持ち、だなー」

それはそれは白々しい声で、力なく笑う。わかりきっていたこと  
を、思い出した。

少女は、恩人だ。下手したら命の、恩人だ。

そして、同時に貴族　少女も少女で大概得体が知れないのだが、  
貴族の館にいるお嬢

さま、むしろお姫さま然とした彼女がそうでなくてどうする、とい  
うニコライの独断と偏

見による見た手である　だ。

お貴族さまだから、平伏すわけではない。金と権力に物を言わせ  
るような輩は、彼自身

大っ嫌いだ。仕舞には盗んでやりたくなる。

自分を、卑下したりしない。

それでも、彼は理解している。

馴れ合って情を移したところで、いつかは破綻してしまう関係を。

少女は、恩人だ。下手したら、命の恩人だ。

少女は、貴族だ。おそらく。

そして貴族は。

すつっすつ、はああああ。

暗くて黒くて苦い何かから眼をつぶって、胸の奥に押し込めてし

まうように、ニコライは深く深く深呼吸する。

そうしてその一部始終を静かに、どこか虚ろな眼で見守り続けていた少女に、なるべく優しく笑いかけた。「何でもないよ」と、翡翠色の瞳を細めて嘘をつく。

「.....」

少女は相も変わらず、ニコライを見つめたまま眉ひとつ動かさない。色の薄い双眸だけが微かに揺れるだけだ。硬直したみたいにかちんこちんになっているのとも違うのだが、寝間着に埋もれるようにして、両膝を抱えて丸まっている。

まあ、しゃべらない自体は別に良いけど。

仲間のチビたちのことを思い浮かべる。

しゃべらなくとも帽子のつばから見え隠れする反抗心たつぷりの目とか、声を出さない

からこそ余計に腹の立つ仕草とか。普段ひねくれてる分、肝心なところでは不器用なダン。

彼には同じ年の相棒がいる。相手にされないのがわかっていても奴に食ってかかっるプル。

いつも怒ってばかりで、ニコライとしてはいつか血管が切れないか密かに心配していた

りするのだが。彼の怒りは心配している証だ。彼がいるから、年長者たちはダンを生温か

く見守っていてやれる。そうでなければ、自分たちが手を差し伸べていた。

極端な無口さんだとしても、ここまで意思表示をしないというのは、自称・チャイルド

・キラのニコライでも、間が持たないというのが、正直な感想だった。

時間も場所も、無駄口は許してくれない。聞きたいことも、聞くべきことも。

これは、幸いなのか？

一応脱出を図ることにして、後退を始める。

「とにかく、助かったよ。アンタが身体張ってくれたチャンスだ、バレないうちに退散さ

せてもらうよ」

じりじりじり。

「.....」

「ありがとう、な」

「.....」

じりじりじり、としゃがんだまま後退する。

「えーと、そう。ご恩は一生忘れませんっ」

勢いだ。むしろ、盗みに入った家の家人に助けられるなど泥棒の恥も良いとこなわけだ。

忘れてしまえたら、とニコライは思う。が、それを彼の矜持プライドは良しとしてはくれないのだ。

ふ、と力を抜くように息をついた。

「じゃ」

窓際の壁に背中がくっついた瞬間、すっくと立ち上がる。まず窓を開けたら、逃げる前

に作戦中止を仲間知らせなければならぬ。ニコライは、事前に調べておいたバジレ侯

爵邸の見取り図と、決めておいた配置とを頭の中に思い描きながら、ちらりと視線だけ窓

へ寄りこして慎重に引く。

よし、行ける。

ひんやりとしていた室内に、秋の風が入む。薄いカーテンがふわりと風を孕んで膨らん

だ。高ぶった神経が冷やされる感覚が心地良いが、寒いものは寒いので、肩がぶるり、と震えた。それは少女も同じだったのか、視界の隅で人が動くのが見えたと。

うん？

否、それだけじゃない。

「……………」

少女が、立っている。

ややや、立っている姿は最初にも見たぞ。では何にそんなに自分は動揺してるんだろう。

少女が、一步一步、近づいてくる。

これは……………意図が不明な分びっくりだが、襲いかかってくる感じはしない。大丈夫、か？

少女が、しゃべった。

……………。そう、それだ！

〈 . . . . . 〉 4 野良猫と約束（前書き）

前回、文字数制限で途中で切れてしまっていたので、再アップしました。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

「ど、どうした？」

答えない。ただ一步一步　ぶたれた後遺症か、ふらふらふらと頼りない足取りで

歩いてくる。ゆっくり、ゆっくり。

見てちゃいけない。それは、ニコライにもわかっているのに、脚が思うように動かない

ああっ危なっかしい！

ニコライは手を差し出そうとして動く腕を、足を、ぐっと堪えた。ナイフの柄を握る手に力が籠って、白くなる。

彼と少女は、こんなに近くにいても、住む世界が全く違う。

「……………」

少女が、足を止める。距離にすると一メートル。少女と少年、二人の視線が交差する。

「わすれ、ない」

「わすれ…………？」

意味は、よくわからない。ただ、囁くような小さな声で、少女は繰り返す。

「わすれない」と。

窓から差し込む月光を正面から浴び、反射して、少女の瞳が湖面みたいにゆらゆらと、

きらきらと、ニコライには光って見える。

これは「忘れないで」とでも言われているのだろうか。それともむしろ「早く忘れて」。

他は「私も忘れません」　は言われる理由がないし、「借りを返すまで忘れるな」

はないと言わないがしかし。ニコライは、ぐるぐると頭を働かせ



る。

きらきらきらり、ゆらゆらゆらり。

この、どこか熱に浮かされたように恍惚とした……ある意味、たった一つのことのみ心囚われることのできる、純粋な眼差しを、彼はよく知っている、ような気がした。

ごくりと唾を飲み込み、一か八か口を開く。

「忘れないよ、当たり前だろ？」

嗚呼。ニコライは思う。

今、自分は絶対変な顔をしている。

困ったように八の字に下がった眉の下で、無理やりに笑顔を作る。いつもの彼ならもう

少し上手に装えたかもしれないが、《逃走後の禍根を残さないために、ここで少女の機嫌

を損ねるわけにはいかない》、その焦りが八割がたを占める現在の心境では、びくびくと

引きつる頬の筋肉に逆らいきれない。

「わすれない」

少女は瞼を伏せると、また静かに繰り返す。それが先ほどと違い、噛みしめるようなも

のへと変化したのをニコライは聞き逃さない。さらに調子を合わせる。

「おうよ。アンタには借りも作つたしな」

それより何より、彼らはまだ何もここから盗んでいないのだ。野こ良猫そとろとして、獲物から

そう易々と手を引くことは、矜持プライドが許さない。

乞われなくとも、いつか。いつか必ずもう一度盗みに入るまで忘れやしないさ。

と、心の中でこっそりと呟くニコライだ。

勿論、その余計な声は少女には届いていないのだが、そもそも彼

の声は少女の耳に届いているのか、そこからもう怪しく感じられた。というのも。

伏せられていた長い睫毛が震えるようにして持ち上がる。そこから零れるものがあつた。

それは、少女の白い頬を伝って、床という暗闇に吸い込まれていく。

泣いている。それは、誰の目にも一目瞭然だった。……泣いている本人を除いては。

少女の双眸から光や熱が消え、代わりに凍りついたかのように硬く、透き通っていく。

けれど、氷が鮮明なレンズの役割を担えないように、その眼もきちんとものを捉えない。

少女の白い手も、部屋も、ニコライも。

「……………っ……………」  
少女が息を飲むと、ふらふらと後ずさった。そのまま後ろへ倒れて尻餅をつく。

ニコライが部屋に侵入した時も、家の者に殴られた時も、まったく微動だにしなかった

少女が。今、両の腕を掻き抱いて、自身の身体にしがみつく様にして、怯えていた。

「お嬢、さん？ 大丈夫か」

ぶたれた時に頭でも打つたのか。

ぼろぼろぼろぼろ。右からも左から零れる雫、それに比例して少女は身を強張らせる。

そつして彼を見上げた顔は僅かに歪んでいた。

「……………きえる」

「……………きえる……消える？ 俺が??？」

まあ、退散することを《消える》と言わなくもないけれど。

「……………ゆめは、いつかさめる。いまがそのときなら、あなたも、

きえる」

囁くような声が、静かに語る。

はあああ。

盛大にため息をつく。

少女の言葉には脈絡がなくて困る。そんな

詩的なおしゃべりに付き合えるおつむ、ニコ

ライさんは持つてないわ。ちくしょーめ。

ずかずかずか、と少女に近づく。一瞬躊躇ったが、ナイフを再度ベルトに戻した。

「目が曇ってんだよ。俺という人間がここにいるのは、紛う方なき現実だ、夢じゃない」

ハンカチなんて上等なものは持ち合わせがなかったので、一応服でよくこすってから。

ニコライは、少女の顔を指で拭ってやる。

外見だけで判断するなら、少女はニコライと、その年は変わらな  
いだろう。けれど。

「……」

「見えるか」

こくり、と頷く。されるがままになっている姿は、あまりにも幼  
くて。昔、誰かさんが

素直で可愛かった頃を、ニコライに彷彿とさせてくれたりする。

ああ、可愛いな！。可愛かったなーメイ。

と、そんな現実逃避はさておき。

先の女の暴拳を踏まえても、月明かりの下に見える少女のあざの  
数は、尋常ではない。

今夜だけでなく日常的に、少女の身に降りかかっている事態が、彼  
にも容易に飲み込めた。

かつて　こうやって器用に物を盗むなんてできなかった頃　の  
自分や仲間の姿と重な

って、ニコライは自然、険しい顔になる。

そして、もう一つ。  
むき出しになった肩に刻まれた烙印が、彼の妄想のとどめとなつた。

少女の細い肩を掴む。三度目は、もう躊躇わなかった。小さな子どもにするように目線  
を合わせてやる。《妹》<sup>メイジ</sup>相手ならやったが最後、子ども扱いするな、と無言で《兄》を蹴り倒そうものだが、少女には丁度いい気がした。

扉は開いたまま。長居はできない。

うまい言葉が見つからず、ニコライは少しばかり乱暴だが、少女の髪をぐしゃぐしゃと掻き交ぜた。本人としては、頭を撫でてやっているつもりのことである。

少女は、何も言わない。

ひと際強く風が吹く。少女の白銀色の髪が煌めいて、そうして、何も見えなくなった。

雲が月を隠して、月光を我がものにする。

ああ、立派な泥棒だ。

くつくつ、と楽しげに。暗闇の中でこそ、いきいきとする男が笑って、見えない少女に囁きかける。

「約束するよ」

同情というのならば、きつときつと、そのとおり。むしろそれ以外の何ものでもない。

でも、それで良かったのだとニコライは思う。

なにしろ彼ことニコライはシンタクラスは野良猫<sup>ニャウ</sup>だ。野良猫とは自由なものだ。

ニコライはシンタクラスは、夜行性だ。謀りごとは闇に紛れるに限る。

そして何よりニコライは、子どもにはなんやかんやで甘いのである。

る。

自分が少女を盗んでやると、彼は誓った。

### 《第三章》 - 1 魔女と仲間

雲ひとつない澄んだ空は、どこまでも高く高く、広い。その中心にただひとつ鎮座する

太陽は、幼子の小さな掌で隠せてしまえるほどに遠いのに、その光の強いこと。

ヒューバートは、ひさしの中から薄い碧色の空を仰いで目を細めた。うんざりと。

今は温かく大地を照らす太陽は、ときに生きとし生けるものから光を奪う。

続きは食事をしながら。

そうお茶を濁して彼女がヒューとマルコを連れてきたのがこのレストランだった。無論

食事をしながら、なわけであるから、レストランに来ること自体は間違いではなかった。

なかったが、長旅の疲労と空腹とを引きずってきたヒューは、一つ不満があった。

はあ、とため息をつく。背中には固く冷たい感触があり、ヒューから少しずつ熱を奪う。

ヒューは、円柱状の石の柱に背をもたせかけながら立っていた。否、立たされているのだ。

ちらりと肩越しに背後のテーブルをうかがうと、陽に透けて鮮やかになった深紅のツイン

テールの後ろ頭が揺れているのが見て取れた。もう少し視線を下げてやれば、背もたれの

上に突き出したプラチナブロンドの跳ねっ毛が見えることは確認するまでもないことなの

で、ヒューはすぐに視線を戻した。

\* \* \*

予約済みだという奥まったテーブルまでは、制服をはち切れそうにさせながらゆっさゆ

つさと身体を揺らして恰幅の良い給仕が案内してくれ<sup>ウエイトレス</sup>た。丸顔に浮かべられた明るい笑

顔には愛嬌がある。よっころしょ、といった体で彼女がマルコの椅子を引いてやる。スラ

ム街からそうは離れていないこの店は、レストランとは言ってもテーブルは店内に三つ、

店外に四つ。あとはカウンター席があるだけのこじんまりとしたものだ。メニューの幅が

違うだけで喫茶店に近いものがある。客は勿論、従業員にも格式ばったところがなく、ど

ちらかたというと常連客を対象とした、庶民向けの店といった雰囲気だ。女性の行為も給仕

としてというより、小さな子どものためという世話好きな彼女の性格が見え、ヒューはむ

しろ好ましく感じた。

どこか、なつかしい。

郷里に残してきた温かな、優しい記憶が、微かに疼くくらいには。マルコに続いて、シザーリオがその隣の椅子に座る。席は三つ。

二人の正面、店内に背

を向けて座る彼らの正面に、ヒューがつこうとしたその時だった。

す、とシザーリオが左腕をヒューに向けて伸ばした。掌を彼に見せるように垂直にし、

まるで犬相手の《待て》のよう、というかまさにそのものに見えなかった。

「……なんだ」

無愛想にヒューが問う。彼女は平然として、

「そこはヒューの席じゃありませんよ」

とのたまうと、彼を制すようにして伸ばしていた手を、人差し指一本だけ立て、軽く左

右に振った。意味がわからず二の句が継げないでいるヒューの代わりに、「おや」と意外

そうに給仕が声を上げる。

「お客さん、三人さまでご予約じゃあ？」

「ああ。ええ、そうらしいですね」

「……らしい？」

訝しげにヒューが眉をひそめる。もともと《予約済み》であったことにはヒューも疑問

を感じていた。店は肩が凝らないという点で居心地は確かに良いが、裏を返せば貴族御用

達や観光スポットになりそうな店には見えないということだ。口には出さないが、ヒュー

には到底予約がなければ入れないほどの名店には思えなかった。

仮に彼女たちが予約をしていたとして、そもそも路銀が底をついた状態で食事をすれば、

確実に無銭飲食だ。三人で食い逃げでもするつもりだったのだろうか、それともまた他人

さまにたかるつもりだったのか。

「……どちらもあり得そうで嫌だ。」

何しろヒューとシザリーオたちとの出会いそのものが、カツアゲのような……否、それ

以外の何ものでもなかったのだから。

「……………」

なんとなく複雑な顔になる。

まあしかし、これは彼の常からなる悩みの種である。今引つかかっただのは、先の発言が

少なくとも伝聞だ、ということだ。



「あらあらまあまあ。お嬢さんたちが《カヴァーデイル》さんじゃなかったの？」

三名さまだったからってつきり、と呟く給仕はどんぐりみたいな丸い目を瞬かせ、素直に驚いている。

《カヴァーデイル》。

口の中でヒューも唱える。聞いたことのない名だった。というのも彼らが店に到着した際に「予約していた者ですが」とシザーリオが口にしながら、すぐさま奥の席に通され

てしまい、予約した当人の名など聞きそびれていたのである。

予約してまでこの店に来る人間がどれだけ少ないか、ヒューに実感させた出来事だった。

「ボクたちは、その《カヴァーデイル》って人にご招待を受けたんだよ」

足の届かない椅子の上で、退屈そうに足をぷらぷらとさせていたマルコが、それはつまらなそうに口を開いた。行儀悪くテーブルに頬杖までついて、細めた碧い双眸は女性に――  
警すら与えない。全身で退屈だと訴えている。そんな子供じみた態度とて、少年姿の彼には許される。

何も知らない給仕は、不機嫌さを隠さないマルコの頭を無造作にくしゃくしゃとかき回すように撫でながら、ふふふ、と優しく笑った。

「退屈そうねえ坊や」

「……退屈だね。呼びつけておいて時間までに現れないとかありえないし」

ていうかボク坊やじゃないよ。

女性の手を両手で引き剥がすと、マルコが頬を膨らませる。ヒュー

「はそれにぶるりと肩を震わせて眉を顰め、シザリーオはおかしそうに、ちょっと彼の頬をつついた。給仕だけが《我儘な子ども》を前に、「まあ、それはねえ」と苦笑を浮かべる。

実のところ、彼らも相手のことをあまり言えない立場であった。やや迷うようにして、

情報収集がてら街の中を散策しながらきたのだ。彼らも三十分はゆうに遅れて到着している。しかしながら、彼女も客商売の人間だ。そこはあえて突っ込まず、仕事に励む。

「ゲストなら、あと何人来るか聞いてないかしらね？ 言ってくればおばさんすぐ準備するんだけど」

そういうと、そのたくましい腕をむん、と持ち上げる。体格を裏切らぬ力自慢らしい。

にと大きな顔全体広がった明るい笑顔には、特に陰りはなかった。気は優しく力持ち。

そんな代名詞がよく似合う女だ。

くすり、とシザリーオは小さく笑みを浮かべる。含みのない自然なそれは、ひねくれ者

の魔女がほんの少し、給仕の仕事に付き合う気になったことをヒュに教える。

「そうですねえ、何人来るかは私にもわかりませんが、本当の意味で店の客人となるのは

おそらく四人から二人くらいだと思いますよ」

「四人から二人？」

「ええ」

自信を持ってシザリーオが頷いて見せる。隣でマルコは「まあ、そうかもね」とフン、

と鼻で笑って同意した。給仕はやや小首を傾げながら、曖昧に笑う。ヒューもまた、話の流れを掴みかねていた。けれど、給仕よりもわかることもある。

また、自分だけが何も知らないのだ。

す、と頭の芯が冷えていく。下がった血がなだれ込んで、全てを覆ってしまふように、感情も隠してしまう。ヒューの顔から困惑の色は消えたが、代わりにふつふつと沸き起こるものを彼は感じた。

ヒューは、不愉快だった。

乱暴にテーブルに手をつく。並べられていたフォークやナイフがぶつかり合って、耳障りな金属音を立てた。「もうーるーさーいー」と、マルコが間延びした声を上げるのを、ヒューは軽く無視した。「どうしましたヒュー」  
薄い金色の双眸と、真正面から対峙する。その真意を問わんとする。

今度は何を考えている。

目は口ほどに物を言う。そんな格言がある。

けれど、シザリオからはヒューは何も読み取れない。嬉しい、悲しい、楽しいと、そ

うどんなに口にしても、どこか空虚で、彼には手応えが感じられない。彼女もまた、教えるつもりなど端からないのだろう。シザリオは頬を包むようにして、両手で頬杖を突く。

テーブルに肘をつけて相手を見上げる仕草は、マルコシアスのそれと似ているが、起源は

彼女だろうとヒューは思う。

はあ、とため息が漏れた。

「 何度も言わせるな。同行している以上、俺にも情報は平等に下ろしてもらおう」

極力感情を殺した低い声。「ふーん？」と、気のない相槌を打つと、シザーリオは興  
味を逸したように彼から意識を外してしまふ。

反応が薄くて面白くない。

ということらしい。また他人をおちよくるつもりでいたのか、と知らず知らずヒューの  
眉が寄り、目が物問いたげに細くなる。

「おい？」

「《オイ》さんなんて人、ここにはいませんよ。きちんと名前も覚えられない人とは私、  
話したくありません」

そう言つて「ねえ？」とマルコに同意を求める。物言いがなんとなく告げ口をする子ど  
ものようだが、告げ口された相手にはひどく有効だったようで、自分に注がれる不穏な視線からヒューは目を背けた。

シザーリオもさることながら、マルコシアスの機嫌を損ねると、後々とても面倒くさい。

不承不承、ヒューは彼女の要求に従つた。

「……………シザーリオ」

異性、特に年頃の女性を名で呼ぶことは、同性のマルコシアスを相手とは勝手が違う。

照れという名の抵抗が、まだ彼の中にある。しかめっ面を隠しもしないヒューに、機嫌を

直したシザーリオが意地の悪い笑みを浮かべる。別にサービス精神からというわけではな

いが、ヒューはもう一度だけ「シザーリオ」と呼んだ。今度は、真摯に。真面目にやれ、

という彼なりの念押しである。

「ええ、はい。なんででしょう」

「なんででしょう、じゃない。約束通り教えてもらおう。お前たちは何を知っていて、俺は何を知らない？」

「はて、約束なんぞいっしまいましたっけ」

素知らぬ顔でシザーリオは小首を傾げた。深紅の髪がさらり、と肩を零れて背を流れる。

マルコシアス曰く、《僕のシィ》自慢の髪を、思いきり引っ張りたくなつたが、ヒューは

我慢する。代わりに自分の髪を掻きあげた。そうして、自慢でも何でもない太く硬い黒髪

の間からじろりと彼女を睨みつける。

「貴様……」

「もー、さつきも言ったところじゃないですかー、私は《オイ》でも《キ》さまでもあり

ません。シザーリオっていう気高くもチャームिंगな名前があるんですよ？」

業とらしく頬を膨らませ、媚びた声を出す。大人びた外見に似合わぬ子供っぽい仕草は、

彼にしては辛抱強く耐えている神経を簡単にすり減らしてくれる。

「まだ言うか！ 約束したろう話をすると」

「それは都合のいい曲解ですねえ、ヒュー。私は名前を覚えてもくれない人と楽しくお話

しできないと言っただけのことです」

「なっ……」

そう言われてしまうと、ヒューは何も言えなくなる。約束します誓います、と彼女が口

にしたわけではない。しかしその誠意のなさには腹が立って、やるせなかつた。

まだ認められていない。

そう、公言されているようで。

舌打ち代わりにヒューが奥歯をぎりり、と噛みしめる。眉をしかめて歪む顔を確認し、恍惚とした笑みを見せるシザーリオに、もうヒューは隠すことなく舌打ちした。

もういい。もう聴くものか。

そうヒューが思い始める頃になって、ようやく彼女は彼の願いを聞き入れることが多い。

同じくらい聞き入れられないことも多くて、素直に受け入れられたことなど皆無に等しい。

その都度ヒューは絡まれる。天邪鬼。という言葉がよくよく似合う面倒くさい人物だ。

今回もまた、不本意ながらヒューは彼女を満足させられたようで、シザーリオは先ほど

の底意地の悪さはなりを潜めた優しい声音で、語り始める。顔を背けたところで澄んだそ

の声は、耳に心地よく届く。

「おやおや、拗ねたんですかヒュー。拗ねたんですね？ 仕方ないなーもう　とは

言っても、私たちだって貴方と条件はあまり変わらないですよ」

と前置きし、シザーリオは少し目を伏せた。「どこから話しまし  
ようか」と呟けるだけ

の情報は握っているらしい。ヒューはじろり、と不満の全てを眼光に込めるつもりで彼女を睨んだ。睨んでから、マルコに眼光で射殺されるのを想像していたが、少年は視線で自分たちの背後を示すだけに留め置く。

「……ああ」

合点の言ったヒューは、ついで二人の背後で困ったように突っ立

つていた給仕へ「すまないが」と声をかけた。察しのよい女性は「ご用がありましたらお呼びください」とだけ言うと足早にその場を辞していく。それを確認し、ヒューは顎で続きを促した。

「では」

ガツン。

テーブルの下でシザリーオがブーツの踵を一度、固い床を踏みながら。衝撃とともに散

った黄と緑の火花を始点に、光の波紋が半径一メートル程の円を幾重にも描く。光の帯を構成している紋様が、その理に基づいてその魔術を発動させた。

エメラルドを溶かしたような、鮮やかに眩しい光の半球体の中に彼らは収まっていた。

というより、収まるようにヒューは膝を折った。透過して見える周囲の景色もまた同じ色

に染まる。ヒューはそのいつもと違う世界を黙って眺めた。動じない。この魔術に関して

言えば、既にヒューも何度も目にしている。それよりも。

「……いつもより、狭くないか」

「何、図体がでかいのを自慢したいわけ？」

ああ、やだやだ。とマルコがせせら笑う声が、外界と切り離された静寂の中で、やけに

はつきりとヒューの耳に届いた。どうにもこの少年は、こと体格のことになると神経質に

なる。理由はヒューも思い当たらないでもないため、ここは突っ込まない。

……マセガキ、と一言では片付かんしな。

と、複雑怪奇としかいえないマルコの生態を思い　　実際、半球体に一瞬走ったノイズ

を確認して ヒューは盛大にため息をつく。下手に刺激すると額を隠しているバンドに手を伸ばしかねない。後先考えない。こんなところばかりが、本当の子どもだ。

「まあまあ、マルコ。私は無駄にでかいよりも貴方くらいの方が好きですよ。抱きつづしがいい感じが」

可愛いですよね。

と、同意を求められても、たとえ可愛いと思ったからと言って抱きつづしたくなるわけではなく、そもそも初対面以来、一度として少年を可愛いと思えたことのないヒューは、なんともいえず眉をあげて、「さあな」とだけ応える。当のマルコはと言えば、嘆くべき

か、歓迎するべきかの狭間で揺れながら難しい顔で考え込み、「シイ、男に可愛いは褒め言葉じゃない、と思う……」

欲望よりも男の矜持が勝利させて言った。聞いてほしい肝心のその人には、全く聞こえていなかったけれども。

「マルコは良いんですよ、単純に抱きしめるだけの話ですから

最近、目下ヒュ

ーをどうやって叩きつづぶそうか悩んでるんです」

「え、ちょ、待って。何それ、え、その《可愛い》ってヒューと同列なの？ さらに喜べないんだけどボク」

「いえ、だから、彼は可愛くないって話で」

マルコは本当に可愛くて良い子って話。

殊更優しい声で、でもうつすらと笑う。白い指が少年の額に巻かれたベルトに触れて、

その固い、鉱物の感触を確かめるようにして指を這わせると、拗ね



て背けていたマルコの  
目が、徐々に見開かれた。

ああ、読まれてる。

そう悟ったマルコは赤面とともに複雑そうに頂垂れる。そうして少女は「マルコ」とも

う一度囁く。駄目押しだ。一つため息をついて、マルコはしびしび「何もしないよ」と、

肩を竦めて見せる。こうして、少女はいとも簡単に少年を制してしまえる。同じくらい簡

単にけしかけることも少女にはできるわけで、少女の一挙手一投足に翻弄されている少年

が、ヒューには不憫に思えて仕方ない。けれど少年自身が望むのだから、彼に言えることはない。

突っ込みどころは山とあったが、ようは全てにおいてシザーリオが悪い。それで落ちて

くとしよう、とヒューは決めてごほん、と咳払いを一つする。

「いい加減、はじめてくれ。無駄話をするための魔術でもあるまい」  
《内緒話の魔法》とシザーリオの呼ぶこの魔術は、術の内と外の音を完全に遮断する。術

の中にいる者には視覚的に色で捉えることが可能　シザーリオの魔力は黄とも緑とも言

えない色として視覚には映る　だが、外からは一切の知覚ができない。物理結界とも違

うので触れようとすれば通りぬけてしまうという塩梅だ。確かに密談には適しているとい

え、彼女はよく使用する。

「あと、少し術域を広げてくれないか。狭くてかなわん。せめて立てるくらいにはだな、」

と言ひ募ろうとするヒューを見越して、「残念ですが」と言葉と

は裏腹に、朗らかな声が遮った。

「前は彼らに魔力の気配から危うく居場所がバレかけましたから、今回は念には念を入れて制御してるんです」

「それは……それは確かに懸命な判断だが、」

極端だ。いつの間にか、ヒューが身じろぎ一つできないほどに半球体は狭められている。

動かせない筋肉が、固まって悲鳴を上げた。

「これも一種の節約ですよね」

「」

「我慢して縮こまってくてください」

ヒューが物理的に小さくなっているのを「あ、は、ははははッ」と、シザーリオは隠し

もせず声を上げて笑う。普段の気取った感じがないだけに、少女が本気で受けているとい

うのがヒューにもわかる。……不思議といつもより腹が立たないのは、本心からのものだ

ったからか。生理的に浮かんだ涙を細い指でぬぐい、ひとしきり笑った少女を恨めしそう

に見つめながら、ヒューはそんなことを考えた。

「はあ、ふふふ、まあ、我慢って疲れるだけで退屈ですし、とつとと済ませましょうか」

シザーリオは左手の人差し指を立て、口元に充てると「ね」と首を傾げる。ゆつたりと

ヒューを捉えた薄い黄金色の瞳の奥で、エメラルドの炎がゆらめく。魔力の放出状態を示

す魔導師の特性だ。

「何から聴きたいんですか」

熱を感じさせない炎が、静かに燃えている。

紅い唇は緩い弧を描き、柔らかな微笑とていつも通り浮かべているのに、その近づきが

たいほどの存在感に、ヒューは緊張していた。

敵か、とでも言えればいいのか。

こんな時だけ、《紅の魔女》の名に恥じない威敵を彼女は体現してみせる。

「さあ」

声が促す。完全にシザーリオの雰囲気飲まれかけていたヒューは、ごくりと唾を飲み込んで、動揺を悟られないように低く問う。

「まずは……この仕事は、どこで得たものだ」

「……………路銀が足りなくなったのはこの街に入る手前、それまではここで仕事を受ける必要はありませんでした。仕事を受けたのは街に入ってからです」

「……………」

答えになっていない。訝るようにヒューが眉を寄せる。

「安心してください、ヒューバート」

愛称ではなく呼ばれたファーストネームは、《真面目な話》をする時の、彼女の合図だ。

ほんの少し見開いた鳶色の瞳がシザーリオを見つめる。

「今回の仕事はあくまで偶発的に受けたもので、貴方を撒くために仕組んだわけじゃありませんから」

シザーリオがそう口になると、「ああ、そういうこと」とマルコも納得したように、半

開きの口から声を漏らす。ヒューは反論を口にしようとは何度か口を動かしたが、実際に半

分疑っていたのだから、何も言えなかった。

「いつかお別れはするでしょうけれど、私たちは契約関係にあたるわけですから、貴方の

前から姿を消すとしたら、ヒューが契約 我々の護衛 を全うするか、私とマルコが契約

を破棄してからです」

ヒューバートと、シザリオとマルコシアスの関係は、傭兵とその雇い主に過ぎない。

そうだ、そういう関係だから。どうしたって自分は部外者でしかないから。最低限の関

係を繋ぐ努力を互いにやめてしまえば、いつでも簡単に切り捨てられる。彼らには、その前科がある。

『貴方には関係のないことです』

地べたに這いつくばって、その二つの背を見送った。言葉にならないその苦い感情と光景をヒューは思う。

あの頃とはヒューの中の意識も覚悟も違う。仕事としての責任感だけでなく、彼の中にも彼らに同行することで成し遂げたい意味ができたから、だから彼らは同行を許可してく

れた。はずである。それでも時々感じられる一線が、あの日呼び覚ます。

それを払拭するように、彼らは言葉紡ぐ。

「それにね、貴方が思うよりずっと、私たちはヒューを気に入っているんです。簡単には

手放しませんよ?」

「そうそう、飽きるまではいじっていじっていじり倒してあげるから覚悟しててよ」

「その、何を安心しろというんだ」

「「ええー?」」

どうにか絞り出した声に、不敵に笑う2人が憎らしくも、嫌いではなくなってきた

のだから、ヒューは耐性とは怖いと思って、同じように微かに笑った。

\*

そんなこんなでシザリーオが語った内容は、

- 一、 仲介屋
- 二、 依頼の内容
- 三、 依頼主の素生

の三つだった。情報源はさすがに明かさなかったが、今回仕事の仲介は彼らの泊まっているボロ宿の主人がしてくれたものらしい。仕事の内容は最近巷で横行している少年少女の行方不明事件の調査、それを自警団でも宮廷騎士団でもない、《カヴァーデイル》氏が依頼しているという。氏の家は貴族ではなく現当主が一代でその財と地位を築いた、成り上がりの商人の家である。報酬については申し分のない相手ではあった。

ただし。

「宿のご主人の話によると、当主にはまだ子どもがいるわけでもありませんし、彼の周囲の人間が消えたという話もないそうです」

ならば、なぜこのような依頼を彼がする必要があるのか、どこか腑に落ちない。加えて

事件の情報もまた主人の網にはほとんどかかっていないのだという。「まあ、ただのおいしい話じゃないよねー？　ってところがシィのお眼鏡に適ったんだって」

実入りも良いし、とはマルコの弁である。

ヒューは、けして接客向きとはいえないだろう覇気のない、というか不健康極まりない

男の鬱々とした青白い顔を思い浮かべてはあ、と思わず息がもらしてしまった。彼が仲介屋だった時点でも驚いたが、親切にも忠告してくれるタイプには思えなかった。

それはそのまま顔に出ていたらしく、

「同業の方からの紹介状、いただいてたんです。そうでもないところの業界、余所者はやっ  
てけませんから」

と、シザーリオが種明かしをくれた。

彼女たちは《何でも屋》を生業としているが、どこのギルドに属しているわけでもない。

理由はさもありなん、ギルドに所属すれば安定して仕事を受けることはできるだろうが、

その分登録者の情報は管理される。追われている身の上で、みすみす情報を残すのは危険

極まりない。しかしながら、身元が保証されていない人間に仕事を紹介してくれるほど、

ギルドの結束も甘くない。今回も彼女が独自に開拓した人脈が活かされたというわけだ。

ここへは報酬の交渉等、依頼の詳細の確認のために、依頼人が指定してきたものらしい。

「なら、客が四人から二人というのはどういう意味だ？」

給仕に対してシザーリオが告げていたのを思い出しながらヒュー

が呟くと、「あらあら、

よく覚えてますねえ」と意外そうに少女は何度か目を瞬かせてから、感心感心と頷いた。

彼らといると、一言一言が情報収集の一環になる。嬉しくもない、とヒューは心の中で「  
ちた。」

「けど、頭は使っていないよね。考えたらわかる単純な話だよ？」

まず交渉には相手と自

分が必要でしょ」

そういつて、マルコはシザリオと、唯一の空席との前のテーブルをとんとん、と叩く。

「三つの席のうち二席は埋まる。残った椅子はボクらが依頼人のどちらか一方のだよね」

「……………あ、ああ」

流石にそれくらいはヒューにもわかる。わかることを一から説明されるとするのは、ど

うにも腹立しいもので。表情筋が引きつるのをヒューは感じた。しかし、かの気分屋が珍しく気まぐれを起こし、青年に説明してくれようというのだ、深呼吸して彼は堪える。

「ヒュー、おばさんがボクたちを《カヴァーデイル》って人と間違えかけたの覚えてる？」

『あらあらまあまあ。お嬢さんたちが《カヴァーデイル》さんじゃなかったの？』

おっとりとして驚いていた女性を思い出す。三名さまだったからてつきり……とかなん

とかとも言っていた。きちんと確認しないあたり、なんともいい加減ではあるが、大きな

ミスに繋がらないのは、一重に閑古鳥が鳴いているせいではないかと失礼なことをヒュー

ーは考える。

「あそこから、下積み時代からの常連客って線は消せる。この店は人目を避けるためにわ

ざわざ選ばれたと見るのが自然だよ。依頼人としては狭い店内、大人数を引きつれてく

るとかえって目立つ。付添い人は一人、もしくは複数連れてくるにしても脇に控えさせて



おける人数にしないと意味がない」

「……………ああ」

「何その間……………付け加えると、ボクらには人数の指定はなかったけど、それを見越し

て複数人分の席を用意する義理が、依頼人にはない」

「ああ、なるほど」

「今なんだ、今なんだわかったの。……………とにかくそうなれば、この椅子は依頼人側に用意されたものと見て、間違いないってわけさ」

ヒューって説明のしがいがなくてやだー、とマルコがシザーリオに抱きつく。席が五十

センチ近く離れているのに器用なことだ、とヒューは埒もないこと思いながら、会話を続ける。努力をする。

「だとしたら、なんでお前が座ってるんだマルコシアス」

「はっ、子どもを突っ立たせて食事に興じられるような人間、ボクは死ねばいいと思ってるからだよ」

吐き捨てるように言うマルコに、ものすごく彼も納得してしまった。彼らは三日三晩の

野宿の末、ようやくこの街に辿り着いたのである。

腹、減ってるよな。お前だって。

だからだろう、同じ結論に至ったであろう少女も、少年にあえて「立て」とは言わない。

ぼんぼんと頭を撫でてやると、やる気を削がれてしまったマルコに変わってシザーリオが説明を引き継いだ。

「誰を連れてくる気か知りませんが、全員が食事をしてもらっても依頼人ともう一人、そして私と

マルコの四人、付添い人が従者さんなら主と一緒に食事は取れませ

んし、そもそも依頼人に食事をする気はないかもしれない。何はともあれ、私とマルコはご馳走になるつもりなので食事の人数は四人から二人、と彼女には告げたまでのことです。そうしてご納得いただけましたか、と綺麗な微笑みをつくる。情性的に「ああ」と頷こうとして、ヒューははた、と動きを止めた。ついで三大欲求の一つが、腹部から盛大に悲鳴を上げた。

「おやおや」

くつくつ、とシザリーオが人の悪い笑みを浮かべる。羞恥に顔面に熱が集まるのを感じながら、ヒューは忘れてはいけないことを強く自覚した。

そうだ、自分も腹が減っているんだった。

「話はわかった、食事の頭数にことごとく俺が省かれているのはよくわかったが、

なぜ俺は立っている必要がある？ 同じように席に着けばいいだろう」

なるべく平静を装いながら言うと、「ぶはっ」と、二つの噴き出す声が、やっぱりそれに続いた。

「もういい、笑うな。わかったからっ」

照れ隠しと笑われた苛立ちとで、思わず声を荒げる。こんな時、

この《魔術》のありが

たみの知れるところで、シザリーオは以前、この《魔術》を「どんなに大声で泣こうが喚

こうが、周囲に一音も漏れることはない」と、説明した。その時はどうにも不穏な空気を

感じたヒューだが、ようは使いようなのである。気兼ねなく怒鳴れるというのは気楽でい

い。……後は、相手が少しでも堪えてくれたならもつと良いのだが、それは望めない。

「ふふふ、別に照れなくてもいいじゃないですか、そうですね。ヒューもお腹、空いてますよね人間ですもの」「うんうん。まあ、行儀が良いとは言えないけどねえ」

「うるさい！」

くつくつくつ。笑い声はなかなか止まらない。眉間の皺が一本増えた頃になってようやく静けさが戻る。

「あはは、まあ、ヒューのお腹の虫のことは置いて」「……………」

「ヒュー？」

「いや、そう、それでいい」

あまり置いておかれすぎても、少し困るかもしれないが、言ったところで話を蒸し返す

ことにしかならない。そう己に言い聞かせて、ヒューは自重する。

「ヒューには私たちの背後に立って、彼らを威圧してもらいます。用心棒よろしく」

空腹で機嫌が悪いくらいが丁度いい、という。

「用心棒というのは確かに間違っていないが……お前はもう少し友好的にことを運ぼうという気はないのか」

自分から敵を作ってどうする。

限りなく正論を唱えたヒューの鼻先に、少女の白い人差し指がすいと突き付けられる。

咄嗟に仰け反ったが、これ以上動く術域を超えてしまう。その姿勢のまま、それを強いる

シザーリオを睨み据える。唇はにんまりと歪められ、目は半眼に据えられたその顔を凶

悪だ。少なくともそこから《友好的》の一欠片も見つからない。

「甘い」

「……………」

「甘いですよヒュー。交渉と言うものはいかに自分たちに有利にことを運ぶかこそが肝心

です。先に隠しごとなんて誠意の基本を欠いたのは《カヴァーデー  
ル》氏です、そんな相

手にはただ聞くななんて生温い

突き付けられていた指が退けられる。そうしてぼん、とマルコシ  
アスの頭の上に置かれ

た。大人しく彼女の膝に収まっていた少年が顔を上げると、うすく  
笑い合う。

その視線がヒューに向かい、通り過ぎてから固定された。

後ろから、きている。

《内緒話の魔法》最大の長所であり短所は、内と外の音を完全に遮  
断するというところだ。

それはつまり周囲の動きを視覚以外では感じ取れないということだ。  
そのためにシザーリ

オとマルコシアスは、店の中の動きが見える席に座ったのである。

完全に背を向けているヒューは、まだ動かない。自分の今の役目  
が用心棒なのだとした

ら、隙を見せるような態度はできない。深く息を吐き出して心を落  
ち着ける。

「隠しごとというのは、吐かせるものです」

静かに少女が続ける。

「存分に威圧してあげてくださいねヒュー」

ああ、お腹鳴らしちゃ駄目ですよ。

エメラルド色の炎がひと際大きく揺れ、そうして次の瞬間には半  
球体ともども掻き消え

た。瞳の端で代わりに燃えた暗く紅い炎とともに、小さかった影が

するりと伸びたのを確  
認して、ヒューは立ち上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3849g/>

---

ひねくれ魔女の掌で踊れ

2010年10月17日14時59分発行